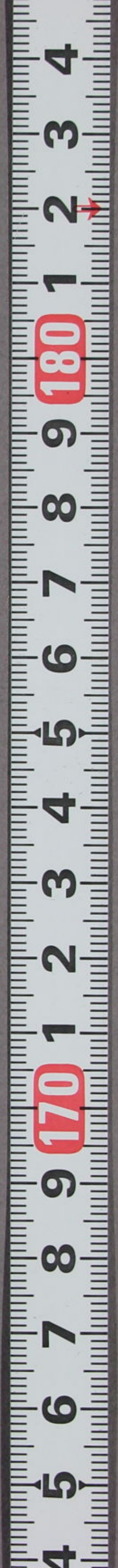


苦海集卷之三

卷之三



蘭更翁
蒼虬翁
千崖翁

全部二册

芭蕉堂三代發句集

南無庵編

早稻田大学
文学部
図書

雲英末雄
53-7530

園更藁 此千出蓬三為公吟也 白
其公以類也 吟也 吟也 吟也
後事定家為家也 三御也 秋國也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也
吟也 吟也 吟也 吟也 吟也

芭蕉堂の三代集の巻末の付

安政六年霜降日

保實卿
保實卿

高松從三位保實卿

芭蕉堂主園更先生之像



李下畫

金水東山敬亮筆

蒼乳成田翁肖像



善亮寫



竹梁千崖翁肖像
法名字滿



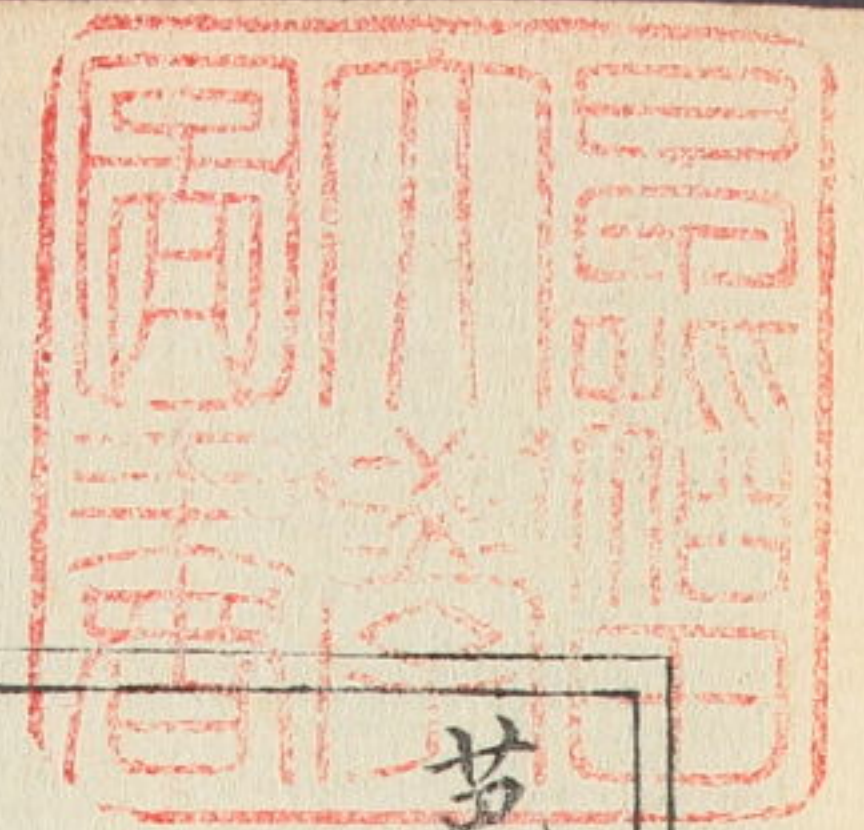
凡例

蘭史翁一世所作の諸家の編集及
自筆に鈔されしものありしは
是非をうしりて
蒼舄翁の老後。撰集あるは
基として其後乃作彼是と出
録にゆきたるこの翁の生前に
除き置
てしはあはれに
これ向集書録少くは
校合は

りしものありしは
改
正し
て
也

千崖翁生涯言行録と
諸國に散在し
るものを集め
て
お
う
け
る
を
拾
ひ
又
諸
集
に
見
え
る
を
併
せ
て
お
う
け
る
を
遺
恨
少
く
に
し
る
を
異
同
は
ら
へ
り
し
を
前
来
し
る
を
前

案再考おきふさうさうあつたれハ僻
 心ハ是と申りふさうを裁きとて偉筆
 能得もあつたれさるる人らむを正
 半のりもあつたれも庶幾也



芭蕉堂三代發句集春之部

洛東 公成 輯
 皇都 何羨 校
 大和 可成 校

正月

正月や女翁おめのとため 園更
 正月も三々るれも人古し
 正月や都のはもま松のきり
 正月お丁鬼りとは下河原
 正月や皮足袋ぬきた極活き子
 正月や猿もとのきり 来りてら

きよきよの月らうしなほけりし

養和

元日

えりや松蔭あささけし

軍更

えりやさのころふりて世に居し

えりしおもしろはけりおもしろ

えりや峰のたもとにけりし

養和

えりやよつたしは念

えりや松蔭夕にけり

えりや旅人通る日お松

えりや湖水をよはは流るる

千崖

今朝春

古稀の歌をうたわく

しんしんあつしつちりさのさ

養和

明春

宗徳の子聖子とてあし

あつたのあつた仁保の身

あつた火をまゐる也庵の身

四方春

あつたのまゝうらまゝの春

花妻

拙狸窟仙有一樹其大あつた

あつた山も下は花の妻

関更

えはりのと先春のしもの
染れたと左のくぬぎの花の
花のそくけりてさうらう
まは

高田に訪ねて
の人のちりて
うらやまの
しんがら
おちか
くさ
あ
ま

かひくま
ひ

隅田川
をさ
あ

花根

初日

くは
天の
静佳
く

初鴨

かきくもとの海の人ししわん
森の竹たきくよたあめあく鳥
子産

恵子

かきくもとの東西を行脚のうた
さあああ

かきくもとの松島らき
集更

松飾

かきくもとの松と庵ハせくあ
あはれ

福壽草

かきくもとの先ほくあ
福壽草

菫菜

かきくもとの福壽草
あはれくもとの福壽草
菫菜は花ありあはれ
あはれにさくあはれ

榎意

かきくもとの夫はあはれ

太篋

かきくもとのあはれ
あはれくもとのあはれ
あはれくもとのあはれ

あはれのあはれ

たゞしむるに一日た

馬渡

おのゝあはれいのかげのあはれ

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

萬歳

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

五更

五更

五更

五更

五更

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

伊降

たゞしむるに一日た

子日

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

たゞしむるに一日た

五更

五更

五更

五更

五更

冬の雀も食ふの子も極細
こつとよの子殿あつたを初子也
子殿

小松引

久世先と借也松引方ありく
ちよつと〜の體をまて小松曳
芥丸

うめ菜

く〜海ほわりの余れうめ菜が
うめ菜殿も赤茶引とあるをこつと上
籠のうめ菜もこつと葉のおろしよ
た〜〜とあつた戸はつとあつた
はあ〜〜とあつた下うめ菜
芥丸

芥丸

冬とわら松風と〜うめ菜うめ
おひつと先をま〜とめ菜つと
備はつと〜しけぬりも持葉梅
芥

芥

と〜起ん芥もよちも君う〜わ
子の戸に芥も〜あ〜とや〜り
甚や昂りもあ〜た〜と芥
と〜た〜の芥の芥芥
芥甲もお〜願の芥うめ
子殿

芥丸

芥丸

芥丸

爆竹

四隅くらあちん〜あり田に爆竹

年あまよき海の出まへとんと川
霧あまよきまらくそそあるとんとい

藪入

藪入おあつらふまきしあつらふり
やふ入る梅はうらふおをそ花は
あつらふまらわくおむお休は
あつらふお接ぐ通うや 古樓

餘寒

村あはさつらふある條をうら
孫あまよきあつらふの栗丸お
ちつらふてあつらふあまよきの松梅

寫更
あつらふ

椿櫻おあつらふある能きあ
寺の椿と都おあまよきの
あつらふあつらふあまよきの
土根をあつらふあまよきの
田一板水引くあまよきの
あつらふあつらふあまよきの

霞

海の日おあつらふあまよきの
山をあつらふあつらふあまよきの

あつらふあつらふあまよきの
あつらふあつらふあまよきの

南無菴眺望

子産
あつらふ
あつらふ

寫更

子よめめ 葉もみ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風

東風

東風吹来ふ 春の風 田中 信泉
ふらふら 吹く人よ 春の風

春雨

春雨の 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風

春雨の 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風

素州の 後を

春雨の 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風
ふらふら 吹く人よ 春の風

九

春毎也嵐の吉よ法障の
まらるや山崎入る鶴の志
ひまあけこやにわのまらる
春毎也大和路をまらる
まらるや物産のうぬまらる
まの雨をにまらる
ま崖

春雪

都也小神をまらる
まらるのむまらるの田角
日晴るい路をまらるの雪
まの雪仰向るまの
ま更

紙漉はるえまらるまの
障りるまらるまの
めまらるのまらるの
まらるまらるまらるの
まらるまらるまらるの
まらるまらるまらるの

雪解

白波とまらる
雪解とまらる
雪解とまらる
雪とまらる
雪とまらる

陽敵

陽光の世よりちて梅の花弄扇
うきうきあめさる形もよえり人の心
うけぬしや清き水波の隙
陽光の外に静かぬりしき
うきうきあめさる形もよえり人の心
陽光の外に静かぬりしき
うきうきあめさる形もよえり人の心
陽光の外に静かぬりしき
うきうきあめさる形もよえり人の心

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

陽光の世よりちて梅の花弄扇
うきうきあめさる形もよえり人の心
うきうきあめさる形もよえり人の心
うきうきあめさる形もよえり人の心

、
、
、
、

長閑

其深き山松花の
のしきも花の
のしきも花の

、
、
、

日永

永き日竹笛の
日永とひく
日永とひく

、
、
、

春力

醉人平をたけしき

うさひの音もさるにさるか
春の空は悠々月あはれ
りつらつ水白の光に春の月
玉あり井もあはれ春の月
り竹のやうさあつさる月
炭の油はくわのさるのさる月
豆腐はくわのさるのさる月
竹のさるのさるのさるのさる月
湯洗の水さるのさるのさる月
さるのさるのさるのさるのさる月
果もあはれ

杖もさるをさるてえさるのさる
出てあつと子供のつらさるのさる
子姫

春夜

春の夜もさるさる果もあはれ
春の空も悠々月あはれ
りつらつ水白の光に春の月
玉あり井もあはれ春の月
り竹のやうさあつさる月
炭の油はくわのさるのさる月
豆腐はくわのさるのさる月
竹のさるのさるのさるのさる月
湯洗の水さるのさるのさる月
さるのさるのさるのさるのさる月
果もあはれ

梅

梅う香もありのうららかなるに
 梅さくや葉も揺るる岩たさく
 山彦や燈の中りさくあの花
 折るもや鬼もあき世をぬの梅
 朝の梅もいかに大に咲く
 日の影も流る肉ゆるお梅う下
 折るもさる許もや梅さく梅白ふ
 梅咲て門も海老やく白し
 角たさく香も眠る梅の姿は
 瘦梅は片枝さけを幸の秋

更

卧龍梅

梅う香も髪揺るる氣くさ
 丈折やさくさくぬるる浪吾のま
 香も破る袖ゆる梅は林う
 梅香も花ゆるさくさく梅佛
 梅うは地も入雪のまゆる
 山甲も人肥く梅はさくさく
 梅うもや梅もさくさく東の

芭蕉翁係前)

梅う香も仰く雲の流中が
 百唄うもさくさく醒醒装の指
 豆腐も梅う香もさくさく梅つま

梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ

病中の吟

瘦骨に梅うらみ つはあはれ
夕暮や 梅のうらみ 梅のうらみ
有来の月 梅のうらみ 梅のうらみ
その中 梅のうらみ 梅のうらみ
梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ
梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ
梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ
梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ

新戸出や 梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ

山あはれ 梅のうらみ

高のうらみ 梅のうらみ

人のうらみ 梅のうらみ

古きうらみ 梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ

うらみ

二つしらの柳吹結み風情の
 意中白柳一本くまらけり
 まー引け山と下きお柳の
 白波也岩の柳能くこき合
 被座を柳の中よむのよれ
 坂本也七本柳こころり立
 橋りくち柳の中よむのよれ
 糸手子柳の柳の葉う経
 煙帯も孤村の柳日暮り
 原中や柳の上の雲を巻く
 柳のよれ岩の影りお葉に

年々の朽木を枯木 葉うぬ
 道のくち柳まうは牛の角
 風まらむく柳ま本の川をうぬ
 火まらむく柳ま本の川をうぬ
 葉の曙さるてき柳
 いとほまらむく柳ま本の川をうぬ
 ちのくちまらむく柳ま本の川をうぬ
 子細くく柳ま本の川をうぬ
 地獄にまらむく柳ま本の川をうぬ
 陰まらむく柳ま本の川をうぬ
 青柳まらむく柳ま本の川をうぬ

衣うけのやねあふり江の柳
 流るる枝よりあり門柳
 布細のるしれ名もふり柳
 禪ちん骨戸の風は柳の
 柿寺と日ころおちる柳の
 花米を運ふちまの柳の
 ちよはさる山はさる柳の
 何日よ人のこめぬ柳の
 ぬく揺る柳のたまる柳の
 流るるとりさ小寺の柳の
 花持えまの活をわく柳の

花柳のささるえける柳の
 庭柳の肩よりなる柳の
 吹ちる風を柳の白うの
 一柳の白髪もさる柳の
 あつちんりさハれある柳の
 としよと集つてさる柳の

昔は家の垣根よりさる柳
 のやうに老のなれよりさる柳

柳のこころをさる柳の
 流るる花をさる柳の
 街をさるさるさる柳の

このまはまがらふらぬ舟の者
わらわはわらわしんはわらわら

藤 甚ま

藤のけし 伸るるるるるるの甚
付るるるるるるるるるるるる

野大根

掘きく 編く 拾ふや野大根

黄鳥

さあはささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ

さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ

うたは世周る論しむ標標のたは

夢をさしつゝあはれ 唯つゝい
夢の川に流るゝあつとこ流るゝ
新女ゆゑの信りそゝわ朱雀口
くまひのわが影をそそきて流るゝ入る
夢中ゆゑの影をそそきて流るゝ
ひゝの影をそそきて流るゝは堤の舟
ちのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くまひのわが影をそそきて流るゝ

金野羅山

子
唯

夢をさしつゝあはれ 唯つゝい
夢の川に流るゝあつとこ流るゝ
新女ゆゑの信りそゝわ朱雀口
くまひのわが影をそそきて流るゝ入る
夢中ゆゑの影をそそきて流るゝ
ひゝの影をそそきて流るゝは堤の舟
ちのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くまひのわが影をそそきて流るゝ

駒島

鶯

家更

ひらひらと波の音はさかすかに

春風

猫恋

あつちのあたりに猫の足音が

春風

くわくわくと鳴る猫の足音が

春風

猫の足音がさかすかに

春風

あつちのあたりに猫の足音が

春風

猫の足音がさかすかに

春風

あつちのあたりに猫の足音が

春風

白魚

あつちのあたりに白魚の足音が

春風

蛤

蛤の足音がさかすかに

春風

鯉

あつちのあたりに鯉の足音が

春風

海苔

あつちのあたりに海苔の足音が

春風

春日

あつちのあたりに春日の足音が

春風

まきのらもさしきしを路の眠りあはら
 春のりや梅り車は山路ゆく
 ぬらりとさしきしを路の眠りあはら
 まきのらもさしきしを路の眠りあはら
 拾葉集の人の夢に能くしの題あり
 とさるるしと
 まきのらもさしきしを路の眠りあはら
 春のりや梅り車は山路ゆく
 ぬらりとさしきしを路の眠りあはら
 まきのらもさしきしを路の眠りあはら

西國より遊水楼あり

春水

橋をくし人多し空まきりあ
 春のりや梅り車は山路ゆく
 ぬらりとさしきしを路の眠りあはら
 まきのらもさしきしを路の眠りあはら
 拾葉集の人の夢に能くしの題あり
 とさるるしと
 まきのらもさしきしを路の眠りあはら
 春のりや梅り車は山路ゆく
 ぬらりとさしきしを路の眠りあはら
 まきのらもさしきしを路の眠りあはら

杜若うは戸にくさるゝおん

しはうゝ水はきみのまきの川

春海

春の海はなをさるゝあひさ

喜山

又らうゝ喜山の山人もこれ

累更

喜山山人の喜山

喜山山人の喜山

喜野

喜山山人の喜山

喜山山人の喜山

喜穴

喜山山人の喜山

孟春雜

吉川の春とあは春の魚

棧谷亭を詠ふ

喜山山人の喜山

四十一首

喜の船老の坂口ふとあはせ

旅人は来やしうらや里の喜

やあふらんさあうら喜の情

初午

初櫻

おぼろげに花散るのより一帯の松
有明色に染み渡りて早らう
奥の山に下はるる花 藤の
一りあるまのこゝろにて初桜
ももあふふあふ共んさうつ桜
月をさくたのむくくわ初桜
是れをさかすまのこゝろにて
谷底に花はるる花 初桜
初桜をさくたのむくくわ初桜
とていふこと一帯に花はるる

子崖
子崖
子崖
子崖
子崖

初花

杖をさしあふる花
とていふこと一帯に花はるる

子崖

のり接して

初花をさくたのむくくわ初桜
初花をさくたのむくくわ初桜

子崖

紅梅

紅梅をさくたのむくくわ初桜
志のしる花はるる花はるる

子崖

草花

草花をさくたのむくくわ初桜

子崖

甘菜の花やまをいと深き 咲つた
 ちのとも形や 西山のほろ夕陽日
 あはれともまたらるるしと人日か
 甘菜の花をいふしあふや松の丸
 菜の花をわらわやあふの流もとも
 甘菜のともやあふの妻ハ 跡を扱
 子好

田柳
 柳秋も今もまをまはれ田柳は
 ともは根をいふしあふ田柳は
 柳秋は流つとも今もまをまはれ
 参紀

甘菜花

川中島や甘菜花をいふ日と斜 園更

焼野
 川柳をいふ日と斜 園更
 柳秋は流つとも今もまをまはれ
 参紀

帰雁
 雁の流つとも今もまをまはれ
 参紀

病屋も猶もまをまはれ 清りぬ

箱をけしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
そとにけしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし

子崖

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし
箱の骨をさしあらしむるなほほし

子崖

三十一

名を辨るべし

鳥の巢を洞と云ふは山辺の
鳥の巢を洞と云ふは山辺の
鳥の巢を洞と云ふは山辺の

蝶

和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは
和蝶やあしはあをきりは

莊子撰

川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり
川波やあやしく却は蝶あり

蜂

六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり
六尺ありては蜂のしるしなり

夕暮らて暫くおぼす子ね庵
いさよこし〜〜おぼえおぼえのりい
とつ〜〜いあ〜〜何れ 離れ

地虫出 今知し地虫出り〜道の中 園更

鹿角落 落〜ある〜鹿角〜女鹿角

鯉鱒 梅布〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ

彌生 大伴〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ

あま

潮干 岸〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ

三月お波〜おぼえ〜おぼえ
物の聲〜おぼえ〜おぼえ
おぼえ〜おぼえ〜おぼえ

雛 神代〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ

雛あ〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ
雛あ〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ
雛あ〜おぼえ〜おぼえ〜おぼえ

花のついでに代は古きを未嘗と
家々も世々も袖まゝのほろほろと
清水あり

花のついでに代は古きを未嘗と

花頂山ふり

花のついでに代は古きを未嘗と

花のついでに代は古きを未嘗と

花のついでに代は古きを未嘗と

故郷の山と水

湖へはちまき吹入ぬ四方の春

ついでに代は古きを未嘗と

花のついでに代は古きを未嘗と

うねりあり

花のついでに代は古きを未嘗と

脚下清風ははるる東昇の方

ま着披君と携ふ車蓋を送る

花のついでに代は古きを未嘗と

花のついでに代は古きを未嘗と

桃里真下杖をたたくはるる夜

花のついでに代は古きを未嘗と

後春一周忌

一年のついでに代は古きを未嘗と

留別

さよふも魂さふもはかしく

七十賀

百もを掃ふあしし花の枝

秋もさくも花の葉もさくも

ゆきもさくも花の葉もさくも

あきもさくも花の葉もさくも

なつもさくも花の葉もさくも

春もさくも花の葉もさくも

あつたは下には是非あきさくも

人あつたは花の葉もさくも

花の

あつたは花の葉もさくも

あつたは花の葉もさくも

あつたは花の葉もさくも

あつたは花の葉もさくも

あつたは花の葉もさくも

病后の杖と曳て

たのしみもさくも花の葉もさくも

朝の花えんと疾起す未母さくも

さくもさくも花の葉もさくも

花の葉もさくも花の葉もさくも

よきおぼるものも花の葉もさくも

つらき〜と人十南溪と花柳の歌
に中おとす

酒を〜と門を〜と花の歌

岱里若雅夫〜と〜と

伊勢の花ふ〜と花の歌

あ〜とせんはぬ〜と花の歌

百年は〜と色い〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

嵐山は雨の〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

あ〜と〜と花の歌

嵐山

あ〜と〜と花の歌

年風と初老の〜と花の歌

花からん後夏よりつららちよふら

八十二歳白壽

花より退屈しぬ遊り柳

子崖

つららつらつら入花は小川

ららららららららららららら

灰ひら真実さうらう花らん

草汗さ人おまらうもろ石

桃

水さうら花のまらうおまら

桃のまらうまはをらうら

あま

習戸のまらうめ家も花の花

あいられまら

りまらら花のまらう眉毛

まら

より雨のまらう戸口の花のま

ちけまららららららららら

海棠

あいられ花のつらら祖又り桃

海棠や戸をせららららら

躑躅

うらまら花一本おまらら

夕山を想ふてゆくはるけし

連翹

連翹のさきかたみそをのほ

連翹のさきかたみそをのほ

岩

岩をまわつて五六すまゐるぬまのつ花

二柳黄といふ

飛まつるうき山吹花は花の中

山吹

山吹花は花のうらな花の乾

やむぬまのつ花は花のうらな花の乾

.

写札

写更

写札

写更

山吹花のさきかたみそをのほ

山吹花のさきかたみそをのほ

山吹花のさきかたみそをのほ

山吹花のさきかたみそをのほ

山吹花のさきかたみそをのほ

茶のさきかたみそをのほ

茶のさきかたみそをのほ

山吹花のさきかたみそをのほ

山吹花のさきかたみそをのほ

茶搦

ついでに茶のさきかたみそをのほ

写札

写更

萱

むらさきの袖をうめぬ茶持た

茶紙

うはらわぬ世にまはる

軍更

茶のやうな胡蝶のふりかへ

茶紙

ぬいもや強垣のうらみ

茶紙

ちりちりともまらぬ西日

茶紙

考へてはるやまのあり所

茶紙

甫鳥や五形五皇と右のり

茶紙

むら男はるまの草花を

茶紙

虎杖

いこもはるまの松の

茶紙

鳥入雲

うらまはるまの

茶紙

桑子

うらまはるまの

茶紙

を布はるまの

茶紙

春夕

あつらぬまの

茶紙

放下信はるまの

茶紙

ゆらぬまの

茶紙

まの眠はるまの

茶紙

暮春

伐傷す楠白ひくろきちけき

朝陽亭

たろろぬねのあつちをきつと

千景

行春

をこいハ花はさうとていん

おろひはこくわいあま

あつち大堰川の流ハきり

ゆくすけを後めりり

孝礼

安良比能示

あつち水花もきくと

厚文

晩春雜

春の林をよほると

田楽の土鳥

大沼に魚も

うら所は松木

不二の山雲

春之部 畢

世宗の堂三代發句集夏之部

四月

蚊の音もくつ心あはれ四月か
さつとぬきもよあけの卯月か
九日は躰踏志らひ四月か
花はも佛のめし四月か
ゆりしと人は四月の嵐山
山水のあはれ四月か

洛東 公成 輯
皇都 杜喟
撰 花樵 校

園更

蒼虬

紙帳

短束のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山
 短束のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

下巻の紙帳は中に紙のきり
 山家もやとて

山家もやとて

まるく色顔のしるす新の山
 みるく色顔のしるす新の山

紙帳

短束のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

團扇

短束のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

呉竹のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

水牛のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

西園のちりり

金銀のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

裸のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

大水のちりりたるいしりき船川
 みるく色顔のしるす新の山

江戸崎 草薙のうらたて扇が

草薙のうらたて扇が 大あつと太郎

冠者といひ小あつと次良殿志

と峰といはぬは机辺をさきん

とてはつと

山中のあつとつとつとつと

夏月

細い魚はつとつとつと

夏の月影のつとつとつと

水はつとつとつとつと

ふとつとつとつとつと

夏更

夏山

大木をつとつとつと

甲斐の白根

百甲のつとつとつと

松林のつとつとつと

松林のつとつとつと

夏更

枝木を扱つ中やまのけし
 山彦や 吹く風もあつた
 うきうき ぼんやりと
 花も花も 花も花も
 今も 今も 今も
 梅も 梅も 梅も
 唐杖も 唐杖も 唐杖も

嬰正 粟

二つお茶子 二つお茶子
 弱法師 弱法師

白茶子 白茶子
 一つお茶子 一つお茶子
 伊勢う 伊勢う
 日よ 日よ
 ひも ひも
 夕風も 夕風も
 礫 礫
 地蔵の 地蔵の
 ちんちん ちんちん
 ちんちん ちんちん

空豆花

世をのりゆくゝ花舟をよきとては
城阿夫婦とあはれ

おほほほめは花の命の身は花が

空豆

落

旅行

山うけのしるしの花をよきとては

落

果樹や白ひひとたは落 落

夏草

る草やとらうくさるさうれ 落

奈古眺

る草もさうくさる浪の行の

川中島

川をゆく夏うきさるさるは落

先師は十七回忌をさうは

一花の花はけけふうき一花の香

乃落さむせ

る料はんたうれさうさう

落

麥

麦の穂やと食後さう枕え

團

湖

生草やとさうくさるさう

落

川ゆゆの流のほろろとてあふら

千唯

若葉

流はくさくさのささやかのたふた
棒突つて旅人出たわりのたふた

葉更
子唯

嗟哉大悲閣也

一日はくさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた

子唯

新樹

+

茂

新鳥おつととて新樹の
ゆゆの流のほろろとてあふら
くさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた
くさくさのささやかのたふた

葉更

白山奉納

新の竹をくさくさのささやかのたふた

葉更

くさくさのささやかのたふた

流はくさくさのささやかのたふた

夏木立

九

病葉

分たて白きらほ〜反本立
三の月の山家のおよ夏木〜
静持てゆかぬ〜
百有八立あつた〜の流り〜

中
四

日光ふ〜多はう〜は大路を
〜

若楓

あけぬ〜花〜と〜と〜と〜

三更

古井あ〜人の〜と〜と〜の楓

五
九

春峯の〜花〜

相花

若楓人まつりお〜と〜と〜
鏡供さる偏〜と〜と〜の楓
若楓あ〜と〜と〜と〜
あ〜と〜と〜と〜の楓

卯花

一里不〜先〜と〜と〜相の花
卯の花や昔〜と〜と〜は小家
卯の花〜と〜と〜と〜の都中
うの花は四月〜と〜と〜
あ〜と〜と〜と〜の卯花〜

舟花やおてしむとおと
うのそねの末はつちさのちま
舟のそねもあまのつちさ都
うのそねもあまのつちさ都
舟花やあまのつちさ

子崖

篇

舟の子も終ありしちのそね
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ

軍更

軍更

写魂

舟のそねもあまのつちさ

軍更

+

伊勢あし

芦原の舟代りしちのそね
時鳥のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ
舟のそねもあまのつちさ

十一

夢のうらやまをよむて年の時を
 ちよとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 編制の海をよむてふらふらとほつたふらふらとほ
 志のふらふらとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 暖か一不二とほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 先くやるとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 あつたふらふらとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 奥山かふらふらとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 東あつたふらふらとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 ちよとほつたふらふらとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 夢のうらやまをよむて年の時を

時をよむて年の時を
 杜宇の月をよむて年の時を
 子規の月をよむて年の時を

病中

病中の冥途の月をよむて年の時を
 ぬくやうな月をよむて年の時を
 夢生れぬ月をよむて年の時を
 涙の月をよむて年の時を
 ひよとほつたふらふらとほつたふらふらとほつたふらふらとほ
 子規の月をよむて年の時を
 夢のうらやまをよむて年の時を

俯し〜〜〜也 鳥のふれぬ
 毛〜〜〜し〜〜ある時
 本〜〜川流は大地
 毛〜〜ある〜〜
 動〜〜名は〜〜子
 不〜〜片は〜〜
 時〜〜由〜〜
 布〜〜は〜〜
 杜鵑松風百〜雨吉〜
 中〜〜は〜〜
 毛〜〜は〜〜時鳥

本〜〜代垢解〜〜子供
 従〜〜意の本魂を〜〜

采吉鳥

大寺中〜〜采吉鳥
 狗さお〜〜采吉鳥
 山〜〜采吉鳥
 鳴〜〜采吉鳥
 采〜〜采吉鳥
 采〜〜采吉鳥
 采〜〜采吉鳥
 采〜〜采吉鳥
 采〜〜采吉鳥
 采〜〜采吉鳥

采吉鳥

疎敷鳥眠り居たり構の奥
あきらかにむしりてん一の谷

病中うらたは兼ふそちて者あり

あまゆふを来候へんあこら
人のたはちひさしくあつていふ言を
なまめくぬ時の中より中あこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら

養丸

十

ひらひらと山を舞ひてこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら

子唯

行こ子
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら

あま

老鷹
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら

子唯

鶉飼
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら
あまゆふを来候へんあこら

あま

十五

病中

かたしめくも 秋もあつても鼻月雨

懺

四つおまののりしめくも馬鳥

みづれ

糝

かの甲十の句

分おし無もちまもんえくもに

みづれ

くもあつめけも糝の鼻彼

みづれ

昔蒲

十もあつめあつてくもあつめ

みづれ

四つおまののりしめくも

みづれ

+

妹もくも踏もくもあつめ

みづれ

あつめくもあつめくもあつめ

みづれ

あつめくもあつめくもあつめ

みづれ

あつめくもあつめくもあつめ

みづれ

あつめくもあつめくもあつめ

みづれ

あつめくもあつめくもあつめ

みづれ

あつめくもあつめくもあつめ

みづれ

眼狂

接もくもあつめくもあつめ

みづれ

百合

皇のあつめくもあつめくもあつめ

みづれ

ゆくはるき 花の姿 ちかゆくゆく
俯仰し 不舎と 雨の 植根が
百合代と あつて おく や子の 上
きり 札

先は 三千三回忌

めいしやー ねんま 向ふ子 ちかゆくゆく

紅之花

神子 村中 梅の 紅の 花
夏 更

萱草

忘る 花の 姿 ちかゆくゆく

若む 花の 姿 ちかゆくゆく

藻花

花の 花の 姿 ちかゆくゆく

萍花

くさくさ やむの 中 ちかゆくゆく

紫系陽花

はる 陽の 花の 姿 ちかゆくゆく

あつた さの 花の 姿 ちかゆくゆく

あつた さの 花の 姿 ちかゆくゆく

あつた さの 花の 姿 ちかゆくゆく

あつた さの 花の 姿 ちかゆくゆく

あつた さの 花の 姿 ちかゆくゆく

合歡花

くもりやうすねはゆある合路
合路さうも柳接の現の岩の上

青梅

青梅の月のゆらふあさゆら

若竹

若竹の月を左へ吹あひく
ここの竹を今解しそら風さへは

草のやうけさあそひるこ縁
さう竹をさうさあさゆらさ

あさゆらさあさゆらさあさゆら
さう竹のさあさゆらさあさゆら

さう竹のさあさゆらさあさゆら

さう竹のさあさゆらさあさゆら

さう竹のさあさゆらさあさゆら

あま

あま

あま

あま

あま

あま

+

田植

田植のあさあさあさあさあさ

田植の中あさあさあさあさあさ

あさあさあさあさあさあさあさ

あさあさあさあさあさあさあさ

あさあさあさあさあさあさあさ

早乙女

早乙女のあさあさあさあさあさ

茄子

茄子のあさあさあさあさあさ

蟬

蟬のあさあさあさあさあさ

あま

あま

あま

あま

あま

融之しこまほら来ぬ 庵まら

火串

角の牙も夕さる長あゝさ年い
囁もちさかえ入ほらしう飛
松のまのちさく梅さ年い

園実

そら

六月

六月や雲らねあゝ海さ富士

雲文

草けあ

六月や雨らあゝ温泉乃流
温泉をあゝ六月さねほ山が
六月や刀あゝめは航はね

+

六月や竹さうあゝひさう

そら

水さ月

さありや花根あさあゝ方と海
あゝ月あゝささうと風の吹あ
さあ月あ日ハあゝゆき舞の仲

雲文

火さ天

あゝ

火さ天あゝささあゝ便せん

日盛

日ささうも中ハ申りて新朝紅
日盛も中あゝささあゝ

そら

二十五

暑

あつちろ掃白のくわやく 日暮るに
暑よりやうけの清くさういあつち
暑あやりの火のよる 瘧る けさあつち
あつち屋あわらるる 暑 野あつち

穀ヶ河原

暑より毛蝶ふるまへて 石 暑く
暑よりおふつと見えは 屏風の陰
あつちのやういふ 暑く 暑く
根きよきいふ 暑く 暑く
暑よりやうけ 暑く 暑く

長更

養也

風

あつちの 暑く 暑く
暑よりあつち 暑く 暑く
暑のあつち 暑く 暑く

風 薫

あつち

あつちのあつち 暑く 暑く
或人を訪ひて

蘭更

千産

涼

あつちのあつち 暑く 暑く
あつちのあつち 暑く 暑く

涼風に暇り上戸はくぬくを
まじしきも翁を志し竹の中
伐竹はふる翁くく風を
まじしきも翁くく風を
涼風も夏の白根を竹はよ

日光

日とさくらに月もくく山涼し

回中祥吉

くく涼し四十八湖をくくは風

温泉の院

温泉もくくし翁くくくく院の月

江の島

名もくくし汝らちありくくは力
涼さおきく物持のほくくゆめ
まじしきも翁くく風を
まじしきも翁くく風を
涼さおきく物持のほくくゆめ
まじしきも翁くく風を
まじしきも翁くく風を

大津梅林

梅もくくし翁くくくく風を
まじしきも翁くくくく風を

まじし

まじしを思ふあしむかおのゆ

子丹

納涼

下涼月ひらく木の上

夏更

夕涼み柳の影を交す

夏更

ほろろ涼も袖ひく夕涼

夏更

河原の夕涼み水くぐり

夏更

夕涼み柳の影を交す

夏更

河原の夕涼み水くぐり

夏更

夕涼み柳の影を交す

夏更

河原の夕涼み水くぐり

夏更

夕涼み柳の影を交す

夏更

+

ゆく水は四條ようはは
ひらく柳の影を交す
並らよてまてさむら
折らよてまてさむら

子丹

青嵐

花をぬ木をさす嵐

夏更

雲峯

木と花の影を交す
雲もさす木をさす
くさくさの影を交す
たぬくさくさの影を交す

夏更

麻

右左四角に麻は志うら

粟更

青田

のいあううううううううううう

粟更

山本石まき子、初孫を祝う

ゆいひまひまひまひまひまひまひま

綿花

丹波の白糸の花のうらうらうら

粟更

凌霄

凌宵の氷まき川まき川まき川まき川

粟更

百日紅

百日紅おらうおらうおらうおらう

粟更

真来所

あうううううううううううううう

川狩

川狩をうらううらううらううらう

川狩や魚串まはるおら

夏中

片羽焼くおらあううううううう

おらあうううううううううううう

醜

あうううううううううううううう

粟更

麻地酒

祖父傳の酒を常飲せし麻地酒

第夏

惟子

うさひしは海苔の男心うぬ

雨乞

るる台火新ようくまの海

不二詣

天地のあつた探らんみ一詣

御後

多岐のささげのささげのささげ

くさくさ松林のささげのささげ川

第夏

夏雑

夏の夕吹候ささげ風もくぬ

第夏

ささげのささげのささげ天の川

越のささげのささげのささげ

よはくはをささげ

ささげのささげのささげのささげ

東家の酒

ささげのささげのささげのささげ

白山の酒

雷ささげのささげのささげのささげ

戸張のささげのささげのささげ

禅林家

心も毛もあつてはるのゆ

移林

空もあつてはるのゆ

送別

夏ふ山色は雨さぬ程の若さを

蒼乳

夏之部畢



一八十年舎藏

